

2022年11月13日 降誕前 第6主日礼拝

メッセージ「オオカミが襲わなくなるときに」

岡嶋千宙伝道師

聖書 イザヤ書 65章17-25節

11月になり、朝晩の冷え込みが厳しくなる日が続いています。日中は20度を越えることもあり、秋を思わせる暖かさなのですが、それでも、最近夕方3時くらいになると冷ややかな風が吹いて、冬の到来を感じさせます。10月下旬から12月上旬。秋から冬への移行期。わたしの苦手な季節です。それまでの夏の名残りの暖かさ、というか近年は暑さですが、それがなくなって、一気に寒さに襲われる時期。私は青森生まれということで、「北国出身なのだから、寒さに強いのでは」と、思われるかもしれませんが、寒いのは大嫌い。とくに、暑い状態から寒い状態への変化の時期は、まったくダメ。冷え性で、どれだけ服を着ても、寒いところで冷気を浴びていると、手足の先が冷たくなって、次第に身体全体が冷えてきて、動けなくなるのです。骨の髄まで冷えが入り込んで、ときに呼吸が浅くなって息苦しくなることもあります。そんな身体の変化にあわせてなのか、内面も弱くなります。ささいなことでも落ち込んで、なかなか立ち直れなくて、自分がいやになる。そうすると、他の人たちにも優しくなれなくて、そんな自分を認めたくなくて、でもどうしようもなくて、ますます自己嫌悪。「だったら、外に出ずに誰とも会わなければいいじゃん」とも思うけれど、そういう訳にもいかないから、「えいやっ」と出てみるものの、精神状態が良くないので、人間関係がうまくいかない。そして自分も周囲の人たちも、大きく傷つけてしまう。今年もその季節がやってきました。

一方では「今年こそはうまくやり過ごしたい!」と思うけれど、他方で「今年もまたダメなんじゃないか」と諦めの気持ちも入り込んできます。ごちゃごちゃとした複雑な思い。だから、ますます固まって縮こまってしまいそうになる。みなさんはどうでしょう。この時期、いかがお過ごしでしょうか。わたしの寒さ対策については、個人的な工夫とか努力とか、ちょっとしたきっかけでなんとかなるようにも思えます。ですが、これが、一人ではなく、複数の人たちに関わることならどうでしょう。小さな輪の中ではなく、より大きな集団。たとえば、学校のクラスとか、職場とか、地域とか、国家とか。一人ですら解決を見いだせないこともあるのだから、異なる背景を持つ人たちが集まった集団なら、もっとめんどくさい状況になって、なかなか前に進めなくなることもあるでしょう。過去の経験がもとで、固まって、縮こまってしまう。これまでも、様々に工夫をして、なんとか打開しようとはしているけれど、どうしても毎回同じ結末になってしまいます。どんなに視点を変えても、環境を変えても、どうしても同じところに落ちいてしまい、いっこうに解決に至らない。そのうち、「どうせまた今回も」という思いを誰もが抱くようになり、将来への展望が見いだせなくなってしまいます。本日、わたしたちに与えられた御言葉。個人的にせよ、集団的にせよ、これまでの経験から将来への展望を見いだせなくなっている人たち、次の一步を踏み出すことができなくなっている人たち、袋小路に入り込んで出られなくなっている人たちへ向けられた神のメッセージが語られています。

新約聖書の中でもよく引用され、教会において馴染みのある「イザヤ書」。愛唱聖句は「イザヤ書」の御言葉という方も多いと思います。わたしも、好きな言葉がたくさんあります。この書の出だし、1章1節に「アモツの子イザヤが見た幻」とあって、それと「イザヤ書」という書名からすると、これはイザヤという人が一人で書いたものなのでは、という印象を受けます。ですが、これまでの研究によって、一人の人物の著作ではなく、異なる年代に生きた複数の人たちによって編まれたものだということが分かっています。本日の御言葉が含まれている箇所は、年代としては、紀元前530年ころ。約500年続いたユダ王国が滅ぼされた後、40年に及ぶバビロン捕囚が終わり、バビロニアに強制移住されていたユダヤの人たちが祖国、その首都であったエルサレムへ帰り出していたころです。当時のエルサレムは、荒廃しきっていました。これまでわたしがメッセージを語るとき、何度か「エミヤ書」を扱ってきましたが、その中でも記されているように、エルサレムを首都としたユダ王国は、新バビロニア帝国の攻撃を受けて壊滅状態にありました。土地は荒れ果て、生き物はいなくなり、王国が反映していた頃の光景は消え去っていました。人々の精神的な支えであったエルサレム神殿も徹底的に破壊され、一部の貧しい人たちを除いて、多くの人たちが、バビロニアへ強制移住させられたのです。エルサレムに残された人々は、異国、新バビロニア帝国の支配を受け、荒廃しきった土地で、わずかな生活資源のもとで、厳しい生活を強いられました。そんな状況にあったエルサレムに、バビロニアに連行されていた人たちが戻ってきた。そのときに語られた神のメッセージ。

旧約聖書の中では「エズラ記」と「ネヘミヤ記」において、当時の様子が描かれていますが、この二つの書物の視点は、バビロニアからエルサレムへ戻っていく人たちのものです。では、一方の、残された側、ユダ王国が滅ぼされた際、バビロニアに連行されず、エルサレムに留まった側の人たちはどうだったのでしょうか。聖書には詳細な記述がないので、あくまでも憶測になりますが、エルサレムに残留した人たちの姿を想像してみます。恐らく、強制移住された人たちと同じように、いや、それ以上に、残留した人々は、過酷な生活を強いられていたことでしょう。街は徹底的に破壊されています。土地は、実りをもたらしません。生活資源はごくわずか。そして、全く知らない国の人たちによる支配を受けています。自由はありません。自由にできる資源はありません。本日の御言葉、20節から23節には、外国勢力の支配下で、厳しい生活を余儀なくされていた人たちの姿が示されています。産まれたばかりの子どもは数日で命を落とす。人々は、自分で建てた家に住むことができない。自分で育てた植物の実りを味わうことができない。すべての労力が無駄に終わる。そんな生活が40年以上にも亘り続いていたのです。そこに、別の土地から、見知らぬ人々が訪れてくる。彼らは、自分たちが住んでいた土地に定住しようとしている。その人たちは語ります。「わたしたちはもともと、ここに住んでいたのです。あなたたちと同じユダヤの民なのです。わたしたちにとっても、あなたたちにとっても、同じく故郷であるこのエルサレム。わたしたちは、この街を再び豊かに

するために戻ってきたのです」。その言葉、信じられたでしょうか。バビロニアの人たちに蹂躪され、抑圧され、搾取されていた、エルサレム残留民。今回、自分たちを抑圧し続ける国バビロニアから、同郷の人々が戻ってきたと言われても、疑念が浮かばないはずがなかったでしょう。エルサレムに残留していた人たちは、バビロニアから帰還する人たちを快く受け入れられなかったことでしょう。帰還する側と、それを受け入れる側、残された側との軋轢は深いものであったのだと思います。だからでしょう。25 節で記されている「狼」「小羊」、そして、「獅子」「牛」のペア。獐猛で勇ましい動物と、温厚で穏やかな動物。反対の性質をもった動物が対になって記されているのは、それが当時のエルサレムにいた人々の状況だったからです。一方で、40 年に及ぶ捕囚を終えて、ようやく故郷に戻ることが許され、祖国再建のために意気込んでいる帰還してきた人々。他方で、これまでの外国の人たちによる抑圧と搾取、そして差別を経験し、今また見知らぬ人たちの流入によって、自分たちの生活環境を壊されてしまうのではと怯えている残留した人々。その対立が渦巻くなかで語られた神の言葉。それは、どちらか一方を擁護するものではありませんでした。どちらか一方を悪として非難するものではありませんでした。どちらの側にとっても、想定外の言葉。そこにいた誰もが、決して思い描くことのなかった将来の絵図を示す神のメッセージ。狼も小羊も、獅子も牛も、共に生きることのできる世界。一方が他方を襲うことなく、一方が他方に怯えることなく、同じ場所で同じものを食べることのできる世界。そんな新しい世界を、神が創ろうとしている。

帰還する側にしても、残された側にしても、ユダヤの人々は、これまで、何度も苦しい経験をし、その度に、神から新しい救いの約束の言葉を聞いていました。アブラハムをはじめとする族長時代にも、エジプトでの奴隷時代にも、出エジプトの時にも、さらに王国時代にも。苦しみと救いの約束が繰り返されるユダヤの人々の歴史において、これまでは、新しく与えられた救いの約束の余波が長続きすることはありませんでした。時代が変わり、世代が変わると、約束は忘れられ、しまいには、その約束を与えてくれた神すらも忘れられていく。そして、また、人々は自分たちで苦しみの状況を作り出してしまふ。何度も何度も、神の救いの約束が与えられては、それを反故にしてしまふ経験を繰り返してきたユダヤの人々。イザヤの言葉が語られたこのときにも、人々は思ったかもしれません。今回もまた同じなのではないか。どうせまた、ダメになるのではないか。ですが、イザヤの語る今回の神の約束は、これまでのものとは全く異なっていました。その違いが、イザヤの描くビジョンの真新しさに現れています。25 節「狼と小羊が共に草を食み、獅子は牛のようにわらを食べる。」聖書の他のどの書物にも記されていない独特で、斬新な世界の描写。さらに、イザヤの語る神の約束は、天地想像のときにまで遡る新しさに満ちています。17 節、18 節で 3 度にわたり用いられている「創造する」という言葉。これは、創世記において神が天地を創られたことを、そして、その地に生きる人間を創られたことを描写する場面で用いられているものです。創世記 1 章 27 節「神は人を

自分のかたちに創造された。神のかたちにこれを創造し、男と女に創造された」。ここの「創造する」と、本日のイザヤ書で語られる「創造する」は全く同じ言葉。つまり天地創造のあのときと同じように、今、神が、新しい世界を創造しようとしている、というのです。天地創造の際に、神は創られた世界と、そこに生きるものたちを見て「良い」と語りました。イザヤは、今回の新しい創造において、神は、ただ「良い」と言うだけではないと伝えます。新しく創られた世界に、そこに生きる人々に、神は「喜び楽しむ」と言うのです。本日の御言葉 18 節「わたしはエルサレムを創造して喜びとし、その民を楽しみとする」。そして、もう一度、19 節「わたしはエルサレムを喜びとし、わたしの民を楽しみとする」。神によって喜ばれる新しい世界。神に楽しみを与えることのできる人間の姿。天地創造以来、これまでのどの時代にも、どの場所でもなされなかった神の救いの業。新しい神の奇跡。新しい世界の創造が、今、始まろうとしている。それは、到底、人間の理解が及ぶものではありません。人の考えのなかに収まるものではなくて、認識することすらできない神の御業。「これまではこうだったから、どうせ今回もダメだろう、いくらやったって無駄だろう」、そんな言葉、そんな態度を、一瞬で吹き飛ばす神の救いが、今、まさに起ころうとしている。

「イザヤ書」の描く神の救い。聖書に記されているその後をみる限り、おそらく当時の人々はすんなりと受け入れられなかったのだろうと推測できます。そして、それは、聖書が今の形になって受け継がれていったあとの時代も同じです。さらに言えば、今もなお、イザヤが描く新しい世界は、現実のものになっていません。何せ、現代に生きるわたしたちが聞いても突拍子もない、現実味すら感じられないようなものなのです。「三びきのこぶた」でも、「赤ずきん」でも、狼は自分より弱い存在を襲うものです。狼とこぶたが、狼と赤ずきんが仲良く暮らすことはありません。おとぎ話の中だけではありません。私たちの生きる現代、権力構造がますます深く、そして複雑に張り巡らされています。その流れに平行するように経済格差がますます大きくなっています。力ある者はより強く、力なき者はより弱くなっています。その構図を覆すことなど、到底無理。対立があって当たり前、当然であるような世界。でも、わたしたちには、示されています。イザヤから約 500 年後、対立を越えて共存できる世界が可能であること、いや、単なる可能性ではなくて、それこそが、本来神が望んだ世界の姿であり、それこそが、この世界の現実であることを示した人物。この世に肉となって現れ、一人の人としての命を生き抜いた神の子イエス。そのイエスが、自分の生き様を通して、死に様を通して、そして復活を通してわたしたちに示してくれた世界。「これまではこうだったから」を貫いて、新しく創造される世界。神が喜び、楽しむ世界。その世界を描くための場。その世界に希望を持ち続けていくための場。そして、その世界を実際に築いていくための場、としての教会。神の御子イエスを信じる者として、今日も、これからも、皆様と共に、神と共に、イエスと共に、その世界が現実になるときを信じ、今まさしくその世界に変わりつつあることを信じ、歩んでいきたいと願います。